

郷土館だより

Vol.16. No.3

1994. 3. 31



三島の教育新時代を象徴する

「三島巒」の扁額

郷土館所蔵品に「三島巒」と書かれた扁額があります。元、市内の小学校が所蔵していたのですが、郷土館設立にともなって移管されたものです。

三島に小学校教育が開かれたのは早く、明治5年の「学制」公布時には、すでに宿場時代の旧問屋場跡地に、私塾「開心痒舎」があって地域教育を行っていました。明治6年、足柄県の通達によって開心痒舎は廃止され、官立の三島学校が始められました。明治11年

には新しく学校建築の気運が高まり、明治12年8月旧陣屋跡地（現在の市役所の場所）に、総工費3,371円余をかけた西洋風建築の新校舎が落成しました。

三島巒の扁額は、これを記念し、当時（明治11年）たまたま東海道を通りかかった、時の太政大臣の三条実美に揮毫を依頼し、後に三島町によって扁額に仕立てたものです。

平成6年度には、この扁額を修復し、市民のみなさまに見ていただきます。

■郷土館企画展 (3月15日～5月15日)

糸 機 と 暮 ら し

～衣の原点から近代三島の発展まで～

特別出品：南米インディオの織物 (内田コレクション)

人の暮らしの三要素と言われるものに衣・食・住がありますが、本企画展ではその内の「衣」をテーマに取り上げ、人がどのような衣生活を送ってきたか、また私たちの郷土で衣生活がどの様に発達したかなどを調べ、展示してみました。

一般に、衣生活は単に「着ること」と理解されていますが、実際は、そこに到達するまでに、衣を支える人々のさまざまな知恵と苦労と経験の積み重ねがありました。

古代においては、衣料は自給自足が原則でしたから、糸の原料となる繊維を調達することに始まり、糸を紡ぎ、布に織り、それを着物に仕立てるまで、すべてが自らの手作業で行われたものです。

また外国では、衣料の自給自足を行っている少数民族が、現在でも存在すると聞きます。

日本でも社会や産業構造が近代化されるまでは、庶民の衣料は大半が自給自足によって賄われていたものです。三島やその周辺の農村では各家庭がハタゴ（織機）などの糸機道具を所有し、綿や繭から糸を紡ぎ、ハタゴにかけて布を織り、家族の着物を作っていたといえます。

糸や布を染める染色も、また、糸機に関わる作業です。水が豊富で美しい三島には、紺屋をはじめ、染め物屋が軒を並べていました。昔懐かしい戦前の商店街には、紺地に屋号や家紋を染め抜いた大小の暖簾が掛けられ、風情ある町並みを構成していたものだと思います。

展示では、以上のような衣の原点から近代三島の発展までを、各種の資料構成で展望してみました。

展示概要

- (1) 糸機と暮らし
糸とり (糸ができるまで)
機織り (布ができるまで)
静岡県ハタゴ、ほか
裁縫 (着物ができるまで)
昔の衣生活をささえた女達
- (2) 三島の町と紺屋
三島の紺屋とその下職
古い三島の町と紺暖簾
- (3) 外国の糸機と暮らし
南米インディオの暮らしの織物
(特別出品：内田コレクション)



グアテマラの民族衣装
ウィビール(買頭衣)



グアテマラの民族衣装
男性用
スーテ
(風呂敷にも利用される)

郷土教室

竹細工と草木染

本年度より、学校休業日に、子供達が昔の人々の生活を体験する「郷土教室」を開設しました。

今年は、昔の子供達が作って遊んだ「竹細工作り」(4回)と、「親子草木染教室」(1回)でした。

●竹細工作り教室

講師 瀬川 至 氏

ナイフを使っての竹トンボ作りなどに挑戦しました。参加したのは4年～6年生。女の子も混じり、瀬川先生よりナイフによる竹の削り方を学んだ後、竹トンボ作りを開始。

日頃、使い慣れないナイフだけに戸惑うことが多かったようですが、だんだんと竹トンボらしい形となり、最後にバランスを見て、出来上がり。郷土館の前で、飛ばすと、高くあるいは遠くに飛び、大喜びでした。

参加者 製作したもの

6月12日(土) 15人 竹トンボ・水テッポウ
7月10日(土) 12人 カニ・シカ
9月11日(土) 6人 竹トンボ・ギシギシ・ユラリトンボ
平成6年
2月12日(土) 10人 竹トンボ・ユラリトンボ

●親子草木染教室

講師 井上一雄 氏

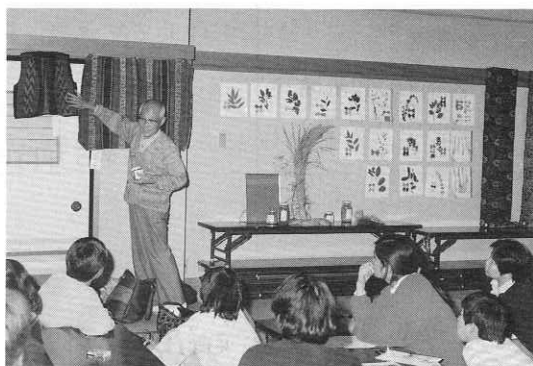
11月13日(土)、4年～中学生とその親が、昔ながらの染色…草木染の体験をしました。さくら作業所からも5組の参加があり、15組30人が、紅葉した櫟の葉から、布へ色を染め出



▲みょうばん媒染液で布が黄色に発色する



▲出来上がった竹トンボとゆらりトンボ
(左端が瀬川先生)



▲草木染と手機の話をされる井上先生

しました。

〈草木染の手順〉

煮出した櫟の葉の染液に布を浸し、しぼって広げ空気にさらす。これを3回ほどくり返した後、媒染液(みょうばん液と生石灰の上ずみ液、又は硫酸第一鉄)に浸すと、さっと色が変わります。みょうばんのものは黄色に鉄媒染のものはねずみ色に。これも又、しぼって空気にさらし、媒染液に浸して…という作業を3回くり返します。こうして色が定着し、最後に水洗いして干します。

布の質や、染液・媒染液の濃度などで、一枚一枚の色あいが微妙に異なります。

世界に一枚だけの布に、一同、感激していました。

平成6年度 郷土館行事予定のお知らせ

三島市郷土館では、平成6年度の行事として、次のような計画を立てています。
より多くの皆様のご来館をお待ちしております。

平成6年度事業計画

1. 展 示

(1) 常設展示

郷土館常設展示の目玉であり、市指定文化財の三四呂人形が塗料の剥落や虫食いなどの損傷が進行しているため、これを修復し、文化財の保全を図ると共に常設展示の充実を図る。

また、三島の初期公立学校「三島巖」の扁額を修理、常設展示し、近代教育史コーナーを設ける。

(2) 企画展示

テ ー マ	催事期間(予定を含む)	開 催 の ね ら い	展 示 内 容
①企画展 「イトハタ(糸機) とくらし」	平成6年3月15日 ～同年5月15日	生活の三要素である 衣生活の民俗的な理 解を深める	衣と生活、衣類調整、 イトハタとくらし、 イトハタの道具、ほ か
②企画展 「句碑と拓本」	平成6年7月下旬 ～同年8月	郷土に多く見られる 文学者等の句碑を拓 本にして一堂に展示 (宮治勲氏作品を中心に)	芭蕉、牧水、ほか
③企画展 「三島の成り立ち」 ～自然環境、地形、 道を中心に～	平成6年10月初旬 ～同年11月中旬	自然環境、地形、道 を基本に成立した郷 土を歴史的輪切りに して眺めてみる	自然環境と人のくら し、地形と集落の成 立、道とマチと文化、 ほか
④企画展 「三島の石造物」 ～石仏、供養塔、 庚申塔、ほか～	平成6年12月下旬 ～平成7年5月	三島市内に数多く見 られる多種多様の石 造物を写真展示、か つその意味なども探 る	サイの神、庚申塔、 巡礼供養塔、名号塔、 馬頭観音、ほか

2. 教育普及(講座、教室等)

テ ー マ	開催期間	開催のねらい	対 象
①郷土教室	年5回	学校5日制に対応して、企画展等に合わせた種々学習会を開催	小学生
②縄文土器づくり教室	7月下旬、 8月下旬	縄文土器づくりを通して、古代の歴史や人の生活に対する理解、学習	小学生
③郷土学習会	8月	夏休みを利用し、三島の歴史・民俗・自然環境などについて学習	小学生
④歴史講座	1回	三島及び伊豆地方の歴史・考古・地理・民俗・自然環境などについての講座	一 般
⑤ふるさと講座	10月～ 連続4～5回	三島の伝統工芸、伝統文化の体験や、歴史などについて市民を対象とした講座	一 般
⑥企画展講座	3回	企画展に合わせて、一般を対象とした講座	一 般
⑦初級・中級古文書講座 (自主グループ活動講座)	各年12回	古文書の解説学習会(育成助長)	会 員
⑧古文書読習会 (自主グループ活動講座)	年23回	古文書の解説学習会(育成助長) *郷土資料を解説、研究し、その成果を刊行物とする	会 員

3. 収集と保管

- 日常的な郷土資料の収集に努めると同時に整理。
- 前年度に寄贈を受けた古文書の分類・整理。
- 収蔵庫、展示室の環境を整備・管理し、収蔵品の保全を図る。

4. 出版活動(調査、研究活動)

刊 行 物	刊 行 の ね ら い	刊 行 時 期
①郷土館だよりの発行	郷土館広報及び調査研究報告などを掲載する	年3回発行 (8月・11月・2月)
②絵はがき 「三四呂人形」(2)	野口三四郎の作品から選んで、その写真を絵はがきとする	7月
③企画展に伴う出版	年4回開催予定の企画展に伴い、図録・パンフレット等の作製	企画展開催時
④三島宿本陣家史料集(11)	古文書読習会員の協力により樋口本陣文書を解説し、出版する	12月
⑤広報みしま 郷土館シリーズ掲載	郷土の歴史や民俗について紹介する	毎月1回発行 市内全世帯配布

収 集 資 料 報 告

(平成5年度・11月～2月)

採集日	提 供 者	住 所	資 料 名	数
6.2.01	植 木 芳 子 氏	三島市大社町1-32	稚児行列衣装(冠、着物)	各1
6.2.04	石 川 靖 子 氏	三島市加屋町2-36	フネ、オヒツイレ	各1
6.2.06	埜 瀬 喜三郎 氏	三島市大宮町2-6-28	電蓄、SPレコード	電1、SP多数
6.2.08	中 島 松 枝 氏	三島市徳倉925-2	草履(畳表)	1

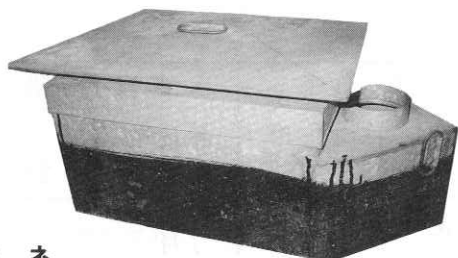


稚児行列衣装

三島では昔から娘の成長を祝っての稚児行列が行われました。行列に加わる女兒の年齢は、たいてい小学校入学前の頃だったといえます。行列は「西町樋口家」から出発し三嶋大社まで行ったものだそうです。行列は4月3日から10日くらいの間に数回行われました。

寄贈を受けた稚児行列衣装は、植木芳子さん(大正元年生)が親から作ってもらって使ったもので、その後衣装は子供達に受け継がれました。

幼さの残る顔に化粧をほどこし、冠を頭に付けた着物姿の女兒が三島の町を行列するのは三島の町の春の年中行事の一つです。



フネ

舟形ブリキ製のフネは、まだ家庭に電機冷蔵庫が普及していなかった頃の冷蔵庫でした。

水がきれい、水温が常に一定(15～6度)の三島では、川沿いの家では食物をフネの中に入れて、川に繋ぎ止めて浮かべておいたものでした。

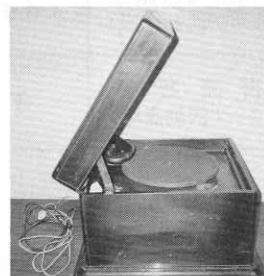
水の都と言われる三島独特の民具といえるでしょう。



オヒツイレ

電気ジャーの無かった頃、おひつに残ったご飯を保温するため、藁製のオヒツイレが使われました。

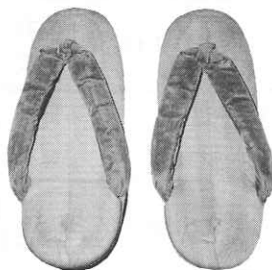
保温力という藁の特性を生かした民具です。



電蓄

蓄音機は家庭の中の文明品の筆頭だったと言えるでしょう。初期蓄音機はゼンマイ仕掛の手回しでしたが、後に電気式になり「デンチク」と称されたものです。

寄贈を受けた電蓄は、手回し式を改造したものです。



草履

戦前の女性はきもの姿で過ごすことが一般的でしたから、履物には草履が下駄が使用されました。

畳表を敷いた草履は、よそ行き用の着物に合わせて履くおしゃれな履物でした。

夏の郷土学習

旧街道探訪……

佐野街道・沢地道を歩く

講師 津高重作氏

冷夏が続く中で、急に猛暑となった8月12日(木)に、4年～6年の子供達17人は、三嶋大社から、沢地の龍沢寺まで、北へ向かう主要古道—佐野街道と途中から箱根へ向かう沢地道の史跡を訪ね歩きました。

津高先生より、三嶋大社・祓所神社の由緒のお話を伺い、道するべや石造物に、佐野街道の面影を見出しながら歩きました。沢地道では灼熱の下、神社・道祖神・横穴古墳をたどり、龍沢寺の木陰でやっと涼をとることが



三嶋大社にて

出来ました。

先生のお話から、日頃、気にも止めないような石造物にも長い歴史があることを感じたようでした。

縄文土器作り教室



▲野焼きの炎の中にマキを入れる



▲やっと出来上がった土器、満足感でいっぱい

素朴な味わいの縄文土器作りを通じて古代の人々の理解を深めるよう、縄文土器作り教室が実施されました。参加したのは市内の4年～6年生30人。3日間にわたるつらい作業によく取り組み、個性あふれた縄文土器が出来上がりました。

7月28日 土ねり

粘土(テラコッタ2kg)・砂(1kg)・赤土(1kg)・水(2～3カップ)を混ぜ、約2時間練ります。暑さで額から汗が出てきます。

7月30日 成形

土器の形を作ります。丸い底の上に輪積み法で粘土を積み上げます。きめのあらい粘土は積み上げると、くずれるものも多く、苦勞しました。最後に、縄・貝などで装飾を加え、よく乾燥させます。

8月25日 焼成

コンクリートブロックで囲った炉の中にマキを大量に入れてカラ焚きします。残ったオキの上に土器を置き、マキを積み上げ、約1時間野焼きをします。火がすっかり落ちた後、土器を取り出すと、赤銅色の野性味あふれる縄文土器となっていました。

郷土館歴史講演会

「象の旅～長崎から江戸へ～」

講師 石坂 昌三氏

現在歴史の道として最も注目を集めている東海道。三島市も三島宿の時代を町おこしに活用しようと模索中です。

今回の講師、石坂先生は長く映画評論の分野で活躍されてきました。定年後「東海道ネットワークの会」に入会し（現在副会長）各宿場を回る一方、江戸時代中期に象が東海道を歩いたことに興味を持ち、資料を収集、現地を歩き、『象の旅～長崎から江戸へ～』（新潮社）にまとめられたものです。

享保13年(1728)、將軍献上のため2頭の子象が長崎に到着します。1頭が病死。残る1頭が享保14年3月、江戸への旅に出ます。各宿場では、象の宿泊のために新たに象小屋を作ったり、飼料を用意したり、道に砂をまくなど、迎える準備も非常に気を遣いました。

2ヶ月余の旅の後、象は將軍に謁見され、その訓練ぶりはいたく吉宗公を喜ばせたとい



われます。長く浜御殿で大切に飼われますが、後に中野の百姓に払い下げられます。ここでは利用されたあと、最後はエサももらえず死亡するという、気の毒なものでした。

先生は、川を渡す苦労や箱根宿での病氣、將軍との謁見など、さまざまなエピソードを交え、象の旅という一大イベントを語られました。最後に各地の宿場おこしの様子や、好印象を持った観光地について興味深く話されました。

- 日 程 3月23日
- 会 場 三島市民文化会館大会議室
- 受講者 96人

■ 企画展

「竹と生活」 報告

平成5年11月14日から平成6年2月13日まで開催した企画展「竹と生活展」が終了しましたので報告させていただきます。

日本の山野には広く竹(笹)が自生しており、その竹は日本人の生活に極めて親しい生活素材でした。今回の企画展では郷土で伝統的に使われた竹を利用した民具やおもちゃを取り上げ、竹と人々のくらしとの関連を考察してみました

特に竹のおもちゃは子供達ばかりでなく、幅広い世代に人気がありました。

展示にご協力下さいました皆様に厚くお礼申し上げます。

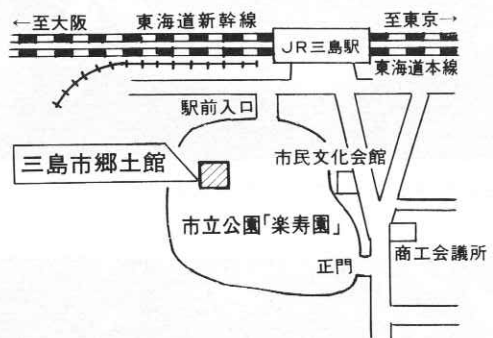
企画展「竹と生活展」入館者

会期 平成5年11月14日～平成6年2月13日

区分	平成5年		平成6年		合計(73日間)
	11月(13日間)	12月(23日間)	1月(25日間)	2月(12日間)	
学生(小・中・高)	885	645	1,640	925	4,095
一般(個人)	2,140	2,105	3,490	1,825	9,560
団体(30人以上)	(10) 602	(5) 185	(11) 536	(6) 454	(32) 1,777
合 計	3,627	2,935	5,666	3,204	15,432

利用案内

休館日 毎週月曜(祝日の時は翌日)
12月27日～1月2日
開館時間 午前9時～午後4時30分
入場無料 (但し、楽寿園入場の際、有料)



三島駅(南口)から徒歩5分。市立公園楽寿園内

郷土館だより No.48

平成6年3月31日発行

(年3回発行)

編 集 三島市郷土館
住 所 〒411 三島市一番町19-3 楽寿園内
T E L 0559-71-8228
F A X 0559-81-3730
発 行 三島市教育委員会